

現在、愛知県名古屋市にある熱田神宮は伊勢湾の海岸線から北へ大きく離れていますが、もともとは伊勢湾に面していました。つまり、神宮の南側は入り海だったのです。この近くには愛知の名の元になった「年魚市潟(あゆちがた)」の石碑もあり、古代は干潟に続き伊勢湾が広がっていたことがわかります。

地形的に見て、後に熱田神宮が建てられたこの地に徐福が上陸したと考えてもいいでしょう。

熱田の地は「蓬莱島」と呼ばれていました。海に突き出た地形が神仙思想に語られる不老不死の仙人が住むという島に見えたのでしょう。徐福が立ち寄ったことから「蓬莱」が付けられたかもしれません。



熱田神宮（愛知県名古屋市熱田区）



清水社

熱田神宮境内地の北方に清水社があります。祭神はイザナギ神・イザナミ神の御子のミズハノメ神で、水を司る神です。社殿裏の一段下がった位置に今も絶え間なく湧き水が出ているところがあり、「お清水さま」とよばれています。この水は目や肌をきれいにするという信仰があります。清水が流れる真ん中に小さな岩が頭を出しています。この岩には楊貴妃にまつわる話があります。それは中国が唐の時代のことです。日本を侵略しようと考えていた6代皇帝玄宗を、楊貴妃に姿を変えた熱田大明神が救ったというものです。楊貴妃に夢中になった皇帝は日本侵略を忘れてしまうのです。やがて反乱が起こったので、大明神は熱田に戻ってきます。しかし、玄宗は楊貴妃のことが忘れられず、風の便りに東海の蓬莱にいと聞き、使者を送るというものです。『熱田神宮』（篠田康雄著 学生社）には、鎌倉末期、比叡山の僧が書いた『溪嵐拾葉集』の中で、「蓬莱宮は熱田の社これなり、楊貴妃は今熱田明神これなり」と紹介されています。熱田神宮一帯が蓬莱の字をとり、「蓬（よもぎ）が島」ともよばれる所以です。



湧水池

